

第9回
全国

～川でつながる草原の恵み～

流域 commons で分かち合う、水源地域の豊かな自然とくらし



草原

サミット・シンポジウム

in みなかみ

期間：2012年10月27日(土)
～29日(月)

会場：みなかみ町立藤原
小中学校体育館
(群馬県利根郡みなかみ町)



10/27 土
13時～
16時30分

現地見学会
●上ノ原「入会の森」
の草原と藤原地区
雲越家住宅・諏訪
神社などの見学
●茅刈り体験

28 日
9時～
16時30分

第9回 全国草原
シンポジウム、パネル展示
【基調講演】
里山における人の営みが、生物多様な
環境を維持
養父 志乃夫氏(和歌山大学大学院システム工学研究科教授)
【分科会テーマ】
●地域の生態系サービスを見える化-マップづくり-
●草資源(茅)の多面的な利用とこれからの茅葺き
●流域 commons による生物多様性保全と価値評価
●草原と観光 (ニューツーリズム)

29 月
9時30分～
12時

第9回
全国草原
サミット
(公開)

<http://commonf.net/9th.sogen>

主催：第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ実行委員会
みなかみ町、みなかみ町教育委員会、みなかみ町商工会、みなかみ町観光協会、森林塾青水、
全国草原再生ネットワーク、みなかみ町藤原上区、みなかみ町藤原中区、みなかみ町藤原下区、
宝台樹民宿組合、水上高原藤原民宿組合、藤原案内人クラブ、宝台樹活性化委員会、日本自然保護協会、
日本茅葺き文化協会、三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング、町田工業
後援：環境省・農林水産省・群馬県・上毛新聞社・群馬テレビ・FMくま・森林文化協会

事務局
みなかみ町役場 環境課 環境政策グループ
〒379-1305 群馬県利根郡みなかみ町後閑 318
TEL：0278-25-5003/ F A X：0278-62-2291
E-mail sh-kimura@town.minakami.gunma.jp

全体プログラム

期間10月27日～29日

10月27日（土曜日）

- 現地見学会** 会場：上ノ原「入会の森」 12時受付 13時～16時30分
- ◎**見学コース**
上ノ原「入会の森」見学～藤原ダムサイト～諏訪神社～雲越家住宅
- ◎**茅刈り体験コース**
茅刈り講習会 ～ 茅刈り

10月28日（日曜日）

- 全国草原シンポジウム** 会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館 8時30分受付
- 9時 開会 挨拶
- 9時15分 **基調講演**：里山における人の営みが、生物多様な環境を維持
養父 志乃夫（和歌山大学大学院システム工学研究科教授）
- 10時15分 休憩（特産品販売・パネル展示）
- 10時30分～12時 **各地から実践報告**
- ◎乙女高原の自然を次の世代に！（山梨市乙女高原）
植原彰（乙女高原ファンクラブ 代表世話人）
- ◎阿蘇の緑を守る（阿蘇市）
山内康二（阿蘇グリーンストック 専務理事）
- ◎人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら（みなかみ町上ノ原）
海老沢秀夫（森林塾青水 幹事）
- 12時 休憩（特産品販売・パネル展示）
- 12時20分 移動・昼食（分科会会場に移動後、昼食）
- 13時～14時30分 **分科会**
- ◎第1分科会 会場：ロッジ「とんち」 地域の生態系サービスを見える化
- ◎第2分科会 会場：民宿「関ヶ原」 茅資源の多面的な利用とこれからの茅葺き
- ◎第3分科会 会場：民宿「吉野屋」 流域コモンズによる生物多様性保全と価値評価
- ◎第4分科会 会場：民宿「本家」 草原と観光（ニューツーリズム）
- 14時40分 移動・休憩
- 15時～16時30分 **全体討論会** 座長：高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長）
◎分科会からの報告とパネルディスカッション・意見交換・シンポジウムのまとめ
- 16時30分 閉会
- 17時～20時 **懇親会** 会場：宝台樹スキー場レストハウス

10月29日（月曜日）

- 全国草原サミット** 会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館 9時受付
- 9時30分 開会
歓迎の挨拶
草原サミットの趣旨説明
岸 良昌（第9回全国草原サミット議長、みなかみ町長）
前回草原サミットの報告
竹下正彦（北広島町長）
- 10時 草原シンポジウムからの報告および問題提起
高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長）
- 10時20分 各自治体における取り組み状況・ディスカッション
- 11時20分 休憩（特産品販売・パネル展示）
- 11時40分 『全国草原サミット宣言』の検討および共同宣言
- 12時 閉会

藤原ガイドマップ

会場案内図



10月27日 土

現地見学会

会場：上ノ原「入会の森」

現地見学会

受付 12時～

◎藤原見学コース 13時～16時30分

- 13時10分 上ノ原「入会の森」フットパスコースを散策（70分）
- 14時20分 休憩（野点お茶）
- 14時40分 雲越家住宅（国指定重要有形民俗文化財）見学
諏訪神社・藤原集落・藤原ダム
- 15時50分 上ノ原「入会の森」
- 16時30分 解散

上ノ原のススキ草原とミズナラ林を散策した後、利根川の水瓶である藤原湖や、上ノ原の茅が使われている雲越家住宅、諏訪神社を見学します。



上ノ原ススキ草原



雲越家住宅



諏訪神社舞台

◎茅刈り体験コース 13時～16時30分

- 13時15分 茅刈り講習（実践指導）
- 14時45分 休憩（野点お茶）
- 15時 茅刈り
- 16時 鎌砥ぎ
- 16時30分 解散

茅について学び、地元の茅刈り名人が茅の刈り方を指導します。その後、実際に茅刈りを行います。1ボッチ（5束）くらいできると良いですね。



茅刈り講習会



茅刈り

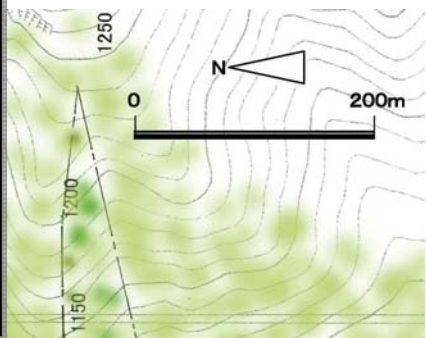


鎌砥ぎ

上ノ原「入会の森」



みなかみ町藤原「上ノ原「入会の森」
 ススキ草原11haとミズナラ林10haからなる町有地。かつては地域住民が入会地として利用していた茅場でしたが、現在は、利根川流域の市民団体、地元住民、行政が協働して保全と活用に取り組んでいます。春には野焼き、秋には茅刈りが行われ、刈った茅は、国指定の文化財をはじめとした茅葺き屋根材に使用されています。
 中央に十郎太沢が流れ、草原には多種多様な動植物が生息・生育しており、町では「自然環境及び生物多様性を守り育てるため昆虫等の保護を推進する条例」の対象地の一つに指定しています。学習の場や憩いの場など、「環境・教育・観光」のフィールドとしても、重要な役割を担っています。



10月28日
**全国
 草原
 シンポジウム**

全国草原シンポジウム

基調講演

会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館

里山における人の営みが、生物多様な環境を維持
 養父 志乃夫（和歌山大学大学院システム工学研究科教授）



養父 志乃夫（やぶしのぶ）プロフィール

1957年、大阪市生まれ。1986年大阪府立大学大学院博士課程修了。農学博士。東京農業大学助手、鹿児島大学農学部助教授を経て、現在、和歌山大学システム工学部環境システム学科、大学院システム工学研究科博士課程教授（自然生態環境工学環境民俗学）

主な著書：『里山・里海 暮らし図鑑——いまに活かす昭和の知恵』『里地里山文化論 上巻—循環型社会の基層と形成—』、『里地里山文化論 下巻—循環型社会の暮らしと生態系—』など

草原を含む里山は、「水や土、空気、雑木林から植林、竹林、果樹園、畑、溜池、小川、水田、土手、畦、屋敷から納屋、牛馬小屋など、一連の環境要素がつながった暮らしの場」である。そこには、人が生まれてから一生を暮らし、世代を重ね、多くの子供たちを育む共同体があった。そして、徹底循環型の持続可能な生活文化、まさに命と暮らしの“おおもと”を築き上げてきた。里人たちのしわだらけの手足とその意思。そこには、皆を守り、次代を育てる暮らしの作法と心が息づいていた。

この暮らしの場こそが、豊かな生物多様性を育んだ。みなかみ、そして、藤原は、食糧(食料)や燃料、水、共に暮らす仲間の絆等々、生活に求むものをすべて再生産できた。首都圏の分まで作り出す“ちから”があった。とりわけ数多くの若者を送り出し続けた。

しかし、今、その里山は、どうなっているのだろうか。大半の若者が都市に消え、過酷な過疎と集落崩壊の現実がある。そこでは暮らしも文化も消え去る。次代の暮らしも消える。

われわれは、これから如何に暮らしを築き、次代を育むのか？如何にして子供たちに将来への夢と希望を育むのか？燃料、食料、水など、暮らしに必要な品々を如何にして手に入れるのか？如何にして環境への負荷を減らし、野生の生きものと共存していくのか？

高度経済成長前、昭和30年代までの暮らしには、持続可能をもとにする生きるための知恵と技、作法がある。不便を感じるにしても、2000年以上、人々の暮らしを支えてきた。燃料やワラなどの有機物を繰り返し使い込み、最後は燃料として循環させた。その時に出るCO₂が再び植物に吸収され、新品の酸素と燃料を再生した。水も一度で捨てたことはない。沢水を生活用水に使う集落は、排水を養魚池やハス田、稲作田へと順に流し、魚や作物に有機物を徹底的に吸収させた。浄化された余水は、再び沢に戻り、数多くの魚介を育んだ。作物や魚介の一部は、人々の食料に循環した。エネルギーの源（みなもと）は、化石燃料でも原子力でもない。ほぼすべてが太陽である。

この暮らしは、決して古くさくはない。現代的な視点から今の暮らしを一つ一つ見直し、そのいしづえを見直すときに来た。源流から里海まで、そして田舎から都会まで、流域の皆が心を一つにし、暮らしと命の“おおもと”を蘇らせるときである。このまま行くと、あすの首都圏、あすのみなかみ、そして藤原はない。すべては利根川の流れが知っている。流域協働の絆。この“ちから”が広まらんことを願ってやまない。

「乙女高原の自然を次の世代に！」山梨市乙女高原

植原 彰（乙女高原ファンクラブ 代表世話人）



乙女高原・草刈りボランティアの最後に行っている恒例の記念撮影



乙女高原・マルハナバチ調べ隊のひとこま。マルハナバチの紙芝居

乙女高原は山梨県の北部、秩父山塊の懐にあるブチ草原です。標高1,700m、草原部分の面積は10ha弱です。6月中旬にはレンゲツツジが咲き、7月下旬から10月上旬にかけては、キンバイソウ、シモツケソウ、ヨツバヒヨドリ、シシウド、アキノキリンソウ、ヤマラッキョウなど多くの花で彩られます。草原の周りにはシラカバ林、ダケカンバ林、ミズナラ林、ブナ林、人工林（ウラジロモミ林、カラマツ林）などさまざまな森林がモザイク状にあります。一つ一つは小さいけれど、湿地が無数にあるのも乙女高原の特徴です。

乙女高原の草原は草刈りによって保たれてきました。戦前までは地元集落の人々によって刈り取られ、冬の家畜のエサに混ぜたり、畑で燃やして肥料にしたりして活用したそうです。戦後はスキー場として開発され、スキー場として管理するため、草刈りが続けられました。ところが、2000年にスキー場が廃止されることになり、それに伴い、草刈りをするしくみも無くなってしまいう危機が訪れました。

そこで、草刈りを続けて乙女高原の草原を次の世代に譲り渡すだけでなく、乙女高原における「人と自然との関わり」も育んでいこうと、乙女高原ファンクラブを設立し、行政や研究機関などと協働で乙女高原の自然を守る活動をしています。具体的には、①春の遊歩道作り、秋の草刈りといった環境保全活動、②花暦調査、中型ほ乳類生態調査といった調査研究活動、③乙女高原案内人による高原の案内活動、小学校の自然教室の支援、乙女高原フォーラムの開催といった環境教育活動、④座談会、ホームページの運用などの情報受発信活動を行っています。

特徴的な活動の一つは乙女高原案内人の養成と活動です。「案内することによって乙女高原の自然を知ってもらい、それを守る力にしていく」をコンセプトにインタープリターの養成講座を開催。その修了生が、たとえば地元小学校の自然学習支援などのインタープリテーションを行っています。

もう一つはマルハナバチ調べ隊です。草原にはたくさんの花が季節を追って咲きますが、それを可能にしているのが多様な訪花昆虫、中でもマルハナバチの存在です。マルハナバチに注目し、年に3回、同じ時期の日曜日にマルハナバチの調査をし、データを集めてもう10年です。

イタドリが増えたのでイタドリだけを選択的に刈り取ってみたり、シカの食害が目立ってきたのでシカ柵を設置して柵内外の植物の生育状態を比較したりという順応的管理にも取り組んでいます。昨年からは、刈り取った草をダムの残土処分場に運び入れるという「藁撒き工法」を試験的にを行っています。

今後のシカ対策が保全上の大きな課題です。皆さんとの情報交換をお願いします。

全国 草原 シンポジウム

全国草原シンポジウム

各地からの実践報告2

会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館

「阿蘇の緑を守る」 阿蘇市

山内康二（公益財団法人阿蘇グリーンストック 専務理事）

～阿蘇の草原は、自然と人との共生の産物～

世界最大級のカルデラ地形の上に広がる、約22,000haの広大で優美な阿蘇の草原。この草原は、千年以上もの昔から、地域の人々による放牧、採草、野焼きなどの作業によって維持されている。

草原を維持管理している牧野組合や地区集落は、阿蘇地域全体で約160組合（地区）ある。

～九州・全国の人々に様々な恵みをもたらしている阿蘇の草原～

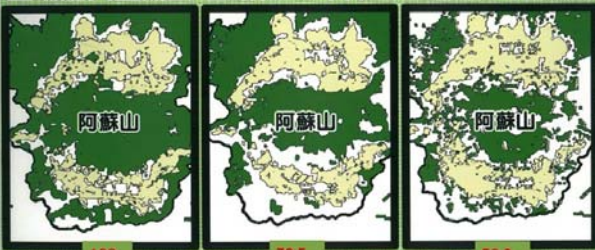
阿蘇は九州の6本の一級河川の源流域にあたり、約300万人近い人々の暮らしを潤し、多くの産業活動を支えている。水収支のデータからは、草原も森林に劣らず地下水を涵養する力がある。

- ◎阿蘇の草原は、熊本特産の阿蘇あか牛の一大産地。
- ◎阿蘇の草原は、阿蘇地域の約7割の世帯が排出するCO₂を吸収する炭素貯蔵庫。
- ◎阿蘇の草原に生育する植物は約600種。全国の草原が減少する中、様々な草原性動植物が棲み続けるかけがえのない環境。日本一のサクラソウ群落に象徴される生物多様性のホットスポット。
- ◎広大な阿蘇の草原は、海外も含め全国から年間1,700万人もの人々が訪れる癒しの台地。熊本県などを中心に世界文化遺産登録や世界ジオパーク認定に向けた取り組みが行われている。



阿蘇の草原の推移

■明治大正期 ■昭和20年代 ■昭和末期～平成初期



草原面積が大きく変化

〔注〕 国立公園協会。濃緑部分が草原部分。
※ この地図を基に解析した面積は、26298ha → 20869ha → 13879ha〕

担い手不足により、危機に直面している阿蘇の草原

平成10年に比べて、阿蘇地域の有畜農家は半分以下に激減、牛の放牧頭数は約4割減少。

草原保全作業に従事している牧野組合員の平均年齢は59歳。平成23年に行われた熊本県の調査では、今後10年以上は野焼き作業等が大丈夫と回答あった牧野組合は全体の約44%。



輪地切り・野焼きボランティア派遣数・支援牧野数の推移

～野焼き・輪地切り支援ボランティアの参加者数は年々増加～

◎今年4月のボランティア事故の後、様々な議論を経て、新たなマニュアルや安全装備品、保険制度の整備と共に8項目のボランティア精神を定め、9月より輪地切り支援活動を再開。

～阿蘇草原再生に向けた取り組みの広がり～

阿蘇草原再生協議会による「阿蘇草原再生募金」の創設

『第一期の募金目標 一億円』

県知事他、九州の経済界代表等による「阿蘇草原再生千年委員会」の発足。

今後の阿蘇草原再生に向けた恒久的な支援の仕組みづくりをまとめる。

熊本県知事の阿蘇草原再生「かばしまイニシアティブ」の発表。

百年の礎を築くため、県が草原再生の取り組みそのものを支援する。

官民一体となって取り組んでいくための草原再生ビジョンを今年度中に策定。

**「人と生きものが入り会うコモンズ村・ふじわら」
みなかみ町上ノ原 海老沢秀夫（森林塾青水 幹事）**


茅刈り 結束を習う



峠道（フットパス）調査

フィールドを捜していた森林塾青水に、水上町（当時）が紹介してくれたのが藤原地区の上ノ原だった。町有地で、面積は約21ha。森林部分と草地部分がそれぞれ半々を占めている。草地部分は地元の人たちが茅場として入会利用してきた場所だが、タニウツギやシラカバが生え、森林化が進んでいた。森林部分はミズナラの自然林。炭焼きなどに利用されていた旧薪炭林だ。

2003年に町と賃貸契約を結び、活動を開始する。活動の方向を探るため、まず03年の1年間、草地とミズナラ林の現況調査や、地元の老人らに上ノ原の利用の歴史などの聞き取りをした。かつて上ノ原は、200haもの広大な茅場だったこと、春先に残雪を防火帯にした野焼きをしていたこと、上ノ原は生物相が豊かで、30年前の調査では群馬県に生息するチョウの3分の2の種類が上ノ原にいたことなどを知る。私たちは地元の人たちと一緒に「茅場を再生する」ことを決意した。

翌04年4月、地元住民や町と協働で茅場の野焼きを40年ぶりに復活。翌5月からは、一般参加者を公募して茅場の再生活動が始まった。生物相調査やヒアリング、草地に侵入した樹木の除去作業や茅刈りなどを年6回実施。作業ではほぼ毎回、地元の経験者が先生として参加した。

「コモンズ村・ふじわら」と名付けたこのプログラムは、私たちの上ノ原での基本活動として、9年たった現在も続いている。

上ノ原の利用は現在、文化財などの伝統的建築物を扱う町田工業が参画し、屋根用の茅を供給・利用する仕組みができています。ミズナラ林でも、ストーブユーザーとのつながりが生まれ、新しい利用の循環ができつつある。集落と集落をつなぐかつてのコモンズである峠道（里道）の再生にも取り組み、都市住民も楽しめる「フットパス」として活用中だ。

「コモンズ」という言葉を使ったのは、「現代版の入会」を考えたかったから。地元によるかつての入会利用はすでに消滅している。草地生態系を保全しようとするれば、地元住民だけでなく下流部の都市住民もかかわる、より広範な共同利用・共同管理の仕組みが必要だ。草地の利用にしても、生き物の生息地、水源、文化資源、エネルギー、景観など現代が要請する新たなサービスを意識する必要がある。かつての入会地「上ノ原」の活動が、流域のさまざまな人が入り会う新たなコモンズの実践事例になればと願っている。

地域の生態系サービスを見える化—マップづくり—

企画・運営：公益財団法人日本自然保護協会

- 綾プロジェクト・ふれあい調査の事例報告 (NACS-J小此木宏明)
- 赤谷プロジェクトの事例報告 (NACS-J出島誠一)
- 森林塾青水の事例報告 (森林塾青水 海老沢秀夫)



綾町Map



赤谷Map

日本自然保護協会 (NACS-J) の「生物多様性の道プロジェクト2011」では、日本の地域社会において、地域の生物多様性を保全し持続的に利用した地域づくりが推進されることを目指して、全国4つの地域で実践的な取り組みを進めています。

本分科会のタイトルとした「地域の生態系サービスの見える化」は、生物多様性を生かした地域づくりを進めるための第1歩として、私たちが最も重要だと考えていることです。「見える化」という言葉は主にビジネス用語として使われていますが、それが意図することは、ただ見える状態ではなく、“共通の認識が持てること” (遠藤 2005) です。

地域の生物多様性が育む「生態系サービス (自然の恵み)」は、その存在すら認識されていない場合や、物質的な存在は認識されていても、「自然の恵み」として認識されていない場合もあります。また、世代によって「自然の恵み」と認識できることが異なる場合もあるでしょう。生物多様性を生かした地域づくりをすすめるためには、まず地域の中で、地域の生態系サービスについて理解し共通の認識を持つことが第一歩であり、そのための具体的な方法として、「マップ」をつくるのが有効だと考えています。

本分科会では、NACS-Jがこれまで取り組んできた具体的な事例として、一つは、宮崎県綾町 (今年日本で32年ぶりのユネスコエコパーク登録が決定) で行った「ふれあい調査」の手法と、その取り組みが地域づくりにどのように役立ったかを紹介。もう一つは、みなかみ町のAKAYAプロジェクトから、魅力ある自然環境を観光資源として活用することを目指したマップづくりの事例を紹介。また、森林塾青水から、今回の草原サミット・シンポジウムの会場であるみなかみ町藤原で取り組んできたマップづくりの事例を紹介して頂きます。

これらの3つの事例から、「生態系サービスを見える化」するための方法として、マップづくりがどのような効果を持つのか？また、生物多様性をいかした地域づくりに繋げるためにどのようなポイントや方法があるのか？皆さんと考えていきたいと思えます。

参考：「見える化-強い企業をつくる“見える”仕組み」 (遠藤功 2005年東洋経済新報社)

草資源（茅）の多面的な利用とこれからの茅葺き 企画・運営：一般社団法人日本茅葺き文化協会

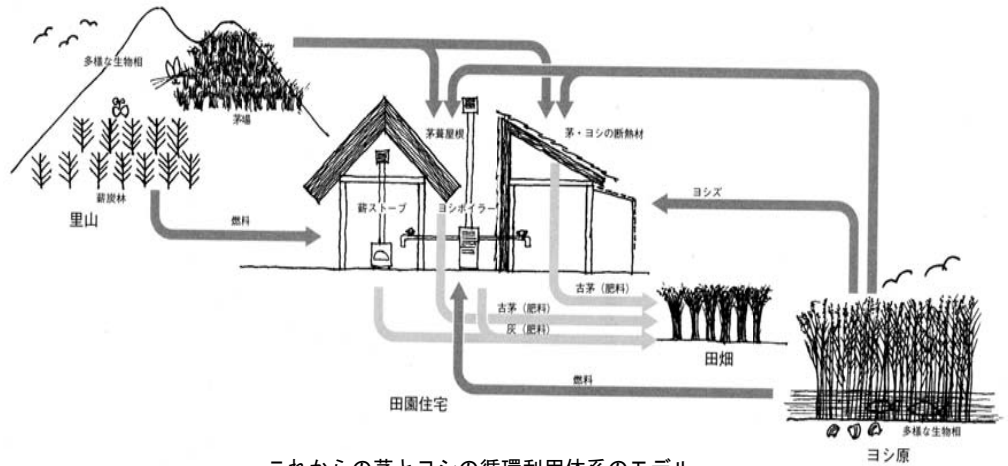
公益財団法人淡海環境保全財団 専門員 田井中文彦
一般社団法人日本茅葺き文化協会 理事 上野弥智代



農村の循環的利用の象徴である茅葺き民家



琵琶湖のヨシ地



これからの茅とヨシの循環利用体系のモデル

●草資源は農村の循環的利用体系の要

茅葺き民家は日本の住まいとして最も長い歴史をもつ普遍的な屋根であり、地域的な多様性も顕著である。その材料はススキやヨシを代表に、小麦藁、稲藁、荻や笹等、多様な草が用いられてきた。このような茅を採取する採草地は茅場とよばれ、山間や水辺に広大な草原が確保され、そこで屋根を葺くための茅を毎年採取することではじめて、その草原も維持されてきた。

この茅は屋根を葺いた後には有機肥料として田畑に施されて豊かな実りをもたらす。化学肥料のない時代に、茅刈りの最終的な目的はこの肥料生産であり、茅葺き屋根はその草の資源の循環利用の中に位置づけられていた。またこのような茅場、ススキ野やヨシ原は昆虫や野鳥、水生生物の宝庫であり、豊かな生物相を育む貴重な自然環境でもある。

しかしながら、近年、農業と生活の近代化によって、肥料は化学肥料に、屋根は工業材料に変わり、茅場と茅葺き屋根は急速に姿を消しつつある。また村落共同体による茅葺き屋根の協働の仕組みも崩れて、茅葺き屋根の維持管理は、材料と労力の確保の点で極めて困難な状況にある。このような状況のなかで、茅葺き民家集落は、伝統的な農業を営む暮らし、すなわち里山の資源の循環的利用体系のつくり出す文化的景観の象徴として、次の世代に守り伝える方策が強く求められている。

●ススキ野やヨシ原の役割

また、ススキ野やヨシ原の環境保全に果たす役割の重要性が近年、再認識され、その保全活動が日本各地で急速な広がりを見せている。中でも霞ヶ浦や琵琶湖等の都市化による水質汚染を改善するための、ヨシ原の再生は多くの都市市民の関心を集め、大きな社会運動となっている。それは護岸工事等で失われたヨシ原を自然環境に戻し、さらにその水質浄化を高めるためにヨシを毎年刈り取る必要があり、その作業が多くの市民参加によって支えられているのである。刈ったヨシは粉碎されて有機肥料として販売され、その活動資金に還元されている。

●これからの茅葺きと草資源の利用法を考える

このようなヨシ原やススキ野の再生をさらに展開するためには、その大量に生産される草の用途として、伝統的な方法である茅葺き屋根として用いた後に肥料として使う循環的な利用の他、断熱材などの建材や燃料、紙など多面的な利用が求められる。さらに、茅葺き民家や茅場、ヨシ原を自然観察の場や農村景観としての観光資源として活用するなど、これからの茅葺きを考える上で、多面的な利用の取り組みを紹介し、貴重な地域資源としての茅資源と茅葺き民家を未来に生かすための多面的戦略とその可能性について議論する。

流域コモンズによる生物多様性保全と価値評価

企画・運営：三菱UFJリサーチ&コンサルティング

阿部剛志 西田貴明

人が手をかけることで育まれる草地の生物多様性や生態系サービスは、農山漁村の人口減少や産業縮小により、地元住民による「コモンズ」だけで保全することが困難になっている。こうした中、みなかみでは「流域コモンズ」という理念の元、地元住民と利根川流域の首都圏住民が協働することで、草地の新たな保全・利用活動を展開している。

しかし、こうした保全活動の運営においては、「生物多様性の社会経済的な価値」をステークホルダー間で合意形成することが難しく、円滑な活動の展開に向けた人手や活動資金確保が課題となることが多い。

この課題を解決していく一つの方策として、現在十分に認識されていない草地の生物多様性の経済価値（レクリエーション価値、非利用価値）を流域コモンズ（受益者）の意思（総意）の反映により定量化し、その経済価値に対する人手や資金を流域コモンズから確保していく方策が考えられる。

そこで第3分科会では、まず、将来人口動態等により地元住民による「コモンズ」だけの保全が困難になる一方、都市部を中心に流域コモンズで保全活動のニーズが高まっていることなどを統計データ等で紹介し、「流域コモンズ」による生物多様性保全の有効性を概説する。

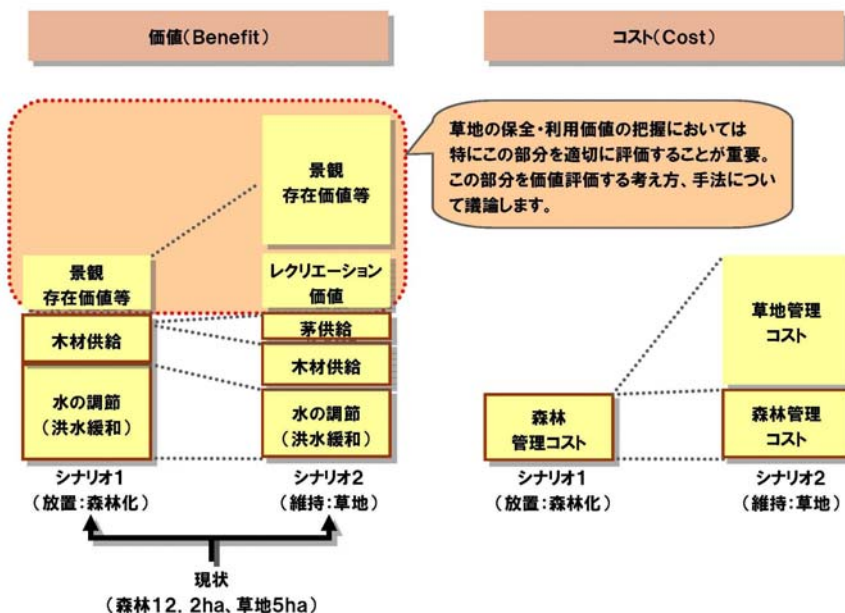
その上で、流域コモンズでの保全活動を安定的に展開していくため（流域コモンズから人手や資金を確保するため）には、食料や木材といった市場化された価値だけでなく、草地でのレクリエーション価値や、草地がそこに存在していること自体に対する価値（非利用価値）まで幅広く評価することの必要性を考える。

これらの整理を踏まえた上で、草地が一般的に保持している生物多様性や生態系サービスの社会経済的価値を整理し、これらの価値把握に向けた経済価値の算定手法、実施プロセスを概説する。その上で、流域コモンズの構成員である首都圏住民（地元住民を含む）が享受している経済価値の算定方法に焦点を当て、アンケート調査によって生物多様性・生態系サービスの経済価値評価を行う「CVM」「コンジョイント分析」の実践事例を紹介する。

最後に、みなかみ町で生物多様性地域戦略の策定による保全活動の促進が検討されていることを踏まえ、地域戦略の推進に経済価値評価結果を活用する方法について参加者との議論を交わしたい。

草地を含むモザイク型の土地利用が維持されることによる価値評価

景観や存在価値を含めなければ、草地を維持する価値は見えにくい(表現しにくい)
これらを定量的に価値評価することで草地保全活動の有益性を説明できる範囲が広がる



第4分科会

草原と観光(ニューツーリズム)

企画・運営：徳永巧（グラウンドワーク大山蒜山）



裏磐梯



大山蒜山

草原と観光を考えるにあたり、自然を生かした観光・教育について日本各地の他の事例の検証を踏まえながら意見交換を行う。

自然を生かした観光を考える場合、屋久島や知床半島、白神山地、小笠原諸島に代表されるような、人里離れた島嶼部や日常立ち入ることのすくない原生自然域でのガイド付きツアーをイメージすることが多いと考えられる。日本の草原は、人里に近い里山的な要素の強い環境にあることから、原始的な自然とは違った魅力があり、人里に近い自然景観域を活用している事例として裏磐梯や大山蒜山地域で展開されている活動を事例として考える。

裏磐梯は会津磐梯山の大规模火山爆発で形成された湖沼群や湿原地帯を自然歩道を活用して自然ガイド(インタープリター)が案内して歩くという形であり、しっかりとしたトレッキングルートが整備され、それを案内できる複数のガイド組織が存在している。

トレッキング型のツアーについては、中高年や若い女性の間で山歩きや森歩きが人気になっており、全国各地でロングトレイル(長距離自然歩道)を整備して、観光利用を行おうという動きが見られつつある。草原は四季の自然の変化が豊かであることに加えて、視界が良好で眺望も開け、人と自然とは共生する農村ならではの生活文化もみられることから、景観の優れた草原をトレッキングルートに組み込み、それを紹介するエコツアープログラムの作成やガイド養成を行うことで、宿泊型のツアーが成り立つと考えられている。

このような考えから鳥取県・岡山県にまたがる大山蒜山地域ではここ数年、昔の牛馬道・参詣道であった大山道を復活させようという動きがあり、大山道周辺の草原やブナ林、雄大な山岳景観や、歴史文化遺産を活用したエコツアーや観光交流事業が活発化しつつある。

次に教育旅行であるが、自然体験学習を修学旅行などに組み入れる中学校や高校が増えており、これまで多かった農家民泊・農業体験を取り入れたものから、森や自然の仕組みや成り立ち、役割について学ぶエコツアーへの人気が高まっている。例えば、富士山エコネットという団体では年間2万人を超える中高生を修学旅行で青木ヶ原樹海などを案内している。そして、大山蒜山地域ではサントリーが「森と水の学校」を開催しており、都市地域の家族連れなどから多くの応募がある。

草原を活用した教育旅行についても、森林や農地などとあわせて、草原の中を歩いて里山的な自然を楽しむコースを設けるとともに、草原と人の係わり、生物多様性、自然の遷移などについて学ぶ環境学習プログラムを作成し、自然ガイド(インタープリター)を育成することで、人気が高まると考えられることから、意見交換を行う中で、首都圏の水源地域である「みなかみ町」らしいエコツアーや教育旅行の可能性を探っていきたい。

10月29日 月
全国
草原
サミット

第9回全国草原サミット

会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館

議長：岸 良昌（みなかみ町長）

参加者：竹下正彦（広島県北広島町長）

星野巳喜雄（群馬県沼田市長）

関 清（群馬県川場村長）

竹腰創一（島根県大田市長）

日置和彦（熊本県西原村長）

貫名功二（茨城県取手市副市長）

千明金造（群馬県片品村長）

堤 盛吉（群馬県昭和村長）

開会：草原サミットの趣旨説明

岸 良昌（第9回全国草原サミット議長、みなかみ町長）

前回草原サミットの報告

竹下正彦（北広島町長）

草原シンポジウムの報告及び問題提起

高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長）

各自治体における取り組み状況

「全国草原サミット宣言」の検討及び共同宣言

閉会

うさぎ追いしかの山…の歌にあるように、草原とその背後に構える山は、かつて地域に暮らす住民が協働で管理し利用した「里地里山」と呼ばれる場所でした。

屋根の材料や家畜の飼料、肥料や敷きわらなど、かつて草は大切な資源でした。しかし戦後は草の用途も限られ、多くの草地が放置され、別の土地利用に変わっていきました。草地に暮らしていた動植物もすみかを追われ、少し前までは普通に見られた花やチョウが絶滅を心配されるまでになっています。

草地は、野焼きや放牧、刈り取りなど人がかかわり、草を利用することで守られる生態系です。草はまた、刈っても刈っても生えてくる頼もしい資源です。今回の「全国草原サミット・シンポジウム」では、草地の再生・利用をめぐる各地の先進事例を議論し、どうしたら草地を価値あるものとして保全できるのか、地域住民だけでなく「流域住民も参加する草地づくり」の可能性などについて話し合います。

<開催自治体> みなかみ町

群馬県の北部、利根川の源流部に位置する「みなかみ町」は、首都圏に水を供給する水源地帯です。5つの日本百名山「谷川岳」「武尊山」「至仏山」「巻機山」「平ヶ岳」を有する山岳の町で、自然を活かした登山・スキー・ラフティングなど、アウトドアスポーツが盛んです。最近では、地域の暮らしや里山の自然・文化を素材にした「教育旅行」「環境体験教室」「エコツアー」も推進しています。

また、平成23年4月「自然環境及び生物多様性を守り育てるため昆虫等の保護を推進する条例」を設定し、上ノ原「入会の森」を指定地区としました。草原の生物多様性を保全することで、豊かな自然を有する町の魅力向上につなげていきます。



上ノ原「入会の森」

第9回全国草原サミット参加市町村



広島県 北広島町 前回サミット開催地

北広島町は広島県の北西部、島根県との県境に位置する、人口約2万人の町です。中国地方最大の河川である江の川の最源流と、広島市のデルタを形成する太田川の源流をなしています。町の面積は広島県の約7%と広い上、標高も200mから1,200mまでの差があります。



雲月山

世界無形文化遺産
壬生の花田植

歴史的に見ると、中国山地は「たたら製鉄」による鉄の生産がさかんに行われた地域であり、町内の至る所に製鉄に関する遺跡があります。また、古くから人口が多く、農耕の盛んな地域であり、神楽や田楽など、稲作に関する祭事が残っています。華やかな雛子とともに行われる「壬生の花田植え」は平成23年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

人口が多く、たたら製鉄や農耕で栄えた本地域では、茅葺きの家屋資材や使役牛馬の飼料として、草が使われていました。現在、町内に残る草原はわずかですが、県内有数の景勝地として、また野生生物のホットスポットとして認知されています。草そのものの利用はなされていませんが、生態系や景観を保全するため、地域の方、都市からのボランティア、NPOなどとの協働により、保全活動を続けているところです。

町行政としても、平成21年に開催した「全国草原サミット・シンポジウム」をはじめ、火入れ条例の改正や、町村レベルでは全国で初となる「生物多様性の保全に関する条例」の制定などの施策を進めています。平成23年には、条例の具体化の第一歩として雲月山の火入れ草原を町の野生生物保護区に指定するなど、豊かな自然を生かす取り組みを進めています。

茨城県 取手市 利根川河川敷の草原

取手市にあるまとまった草原としては、河川、特に利根川の河川敷にあるものに限られます。ただ、市内中流部はゴルフ場や運動公園として利用されており、上流部は国土交通省が調節池を整備するための工事を進めているため、下流部の小貝川との合流点付近の草原が唯一残っているものです。

この草原は利根川に沿った台地の斜面から成る自然堤のすぐ下の河川敷に広がっており、約70haほどあります。植生はヨシ、オギを主体としたもので、クワやヤナギ類の樹木が混淆しており、かつてトネハナヤスリやタチスミレなどの希少な植物が確認されたことがあります。またオオヨシキリやオオジュリンをはじめとする多種の小型鳥類が生息しているのをはじめ、カヤネズミなどの哺乳類も含めた多種多様な小動物の棲み処ともなっています。そのため、自然観察やバードウォッチングの場として市内外の方々が訪れています。また、常磐線取手駅付近の利根川堤防上から東へ小貝川堤防上に至る市のサイクリング道路がこの草原の中を通過しており、豊かな自然を体感しながら歩くことができます。

市では台地部の斜面林を含めたこれらの貴重な自然環境を保全するため、平成8年度に策定した「大利根橋下流環境整備基本計画」において自然環境保全ゾーンとして位置付け、民有地の買収などをすすめてきた結果、現在では一部を除き国土交通省あるいは市の所有となっています。

市内に残る貴重な、市民だけにとどまらない多くの人々の共通の財産として、国土交通省とも協力しながら今後も保全のための努力をしていきたいと考えています。



利根川河川敷

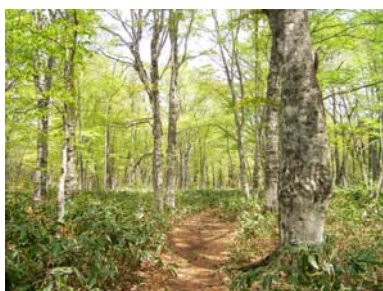
第9回全国草原サミット参加市町村

全国
草原
サミット

群馬県 沼田市 通年の森林リゾート「玉原高原」



玉原湿原・キンコウカ



玉原高原・新緑のブナ平

沼田市の中心部からおよそ20kmの位置にある玉原高原は、標高1,200m～1,500mの国有林に開かれた通年の森林リゾートです。夏のラベンダー畑は冬にはスキー場となり、ライトトレッキングやサイクリングなどもあわせ、四季を通じて楽しむことができます。

この玉原高原は、ブナの森を見られる場所としては東京から最も近い距離にあり、間近でブナの巨木を見られることから多くの人々が訪れています。

かつて、昭和4年～19年まで続いた「官行斫伐(しゃくばつ)事業」、つまり国による森林伐採事業が行われ、ブナの巨木の幹は床板に、枝は木炭に加工され、森は次第に破壊されていきました。今私たちが目にする玉原のブナ林の大部分は、この官営事業による大規模な伐採をした区域ですが、一見、伐採したことがわからない自然な姿を見せています。これは、この伐採事業が将来の森の回復を考えて計画的択伐方式で行われたことと、その後の長い年月のおかげにほかなりません。

なお、標高1,300mのこのブナ平では、春にはやわらかな木漏れ日の新緑、夏には避暑地として、秋には素晴らしい紅葉、冬は雄大な姿と、季節を問わない魅力が人々の心を惹きつけています。

また、玉原湿原は、武尊山の山麓に広がる日本海型ブナ林に囲まれている湿原です。植生の珍しさから尾瀬にたとえられ「小尾瀬(こおぜ)」と呼ばれており、ミズバショウを始め、四季を彩る草花を見ることができます。

この地域は、国有保安林(水源かん養保安林)でもありますので、私たち一人一人が自然を壊さないよう努めていかなければなりません。

群馬県 片品村 「尾瀬の郷 片品村」

「尾瀬の郷 片品村」は、群馬県の北東に位置しており、新潟県・福島県・栃木県に接しています。面積は約392km²、人口は約5,000人、周囲を日本百名山の至仏山・日光白根山・武尊山などの2,000m級の山々に囲まれています。

全国でも希な「尾瀬」・「日光」の2つの国立公園を持つ、自然の宝庫の村であります。高地を生かした高原野菜や果樹栽培等が盛んであり、観光と農業の村です。

●尾瀬エリア

尾瀬は、雄大かつ繊細な自然が残ることで知られる、国立公園特別保護地区ならびに特別天然記念物に指定され、ラムサール条約の登録湿地でもあります。春の尾瀬のシンボル「ミズバショウ」や、夏のニッコウキスゲやワタスゲなど、艶やかな彩りで訪れる人を歓迎してくれます。

●丸沼エリア

栃木県との県境にそびえる標高2,578m白根山は、の関東以北ではもっとも高い山です。貴重な高山植物が豊富で、「日光国立公園」の特別保護地区に指定されています。菅沼からの登山道の残雪がなくなる6月下旬から、白根の名を持ったシラネアオイが咲き始めます。

●武尊(ほたか)エリア

武尊山の標高は2,158m。名前の由来は日本武尊(やまとたけるのみこと)の東征の故事によるといわれ、前武尊山には日本武尊の銅像があります。この山麓の牧場にはキャンプ場が整備され、高原の自然を満喫できます。



尾瀬ヶ原のミズバショウと至仏山



標高2,000m級の山々に、初心者から上級者までが満足できる彩なゲレンデをもつ極上の雪質と眺望自慢のスキー場が7つあります。

第9回全国草原サミット参加市町村



群馬県 川場村 「環境王国」



稲刈り

川場村は全国に12市町村ある「環境王国」の一つとして認定を受けています。平成20年、制度発足と同時に認定を受けた4町村のひとつです。

「環境王国」は、地域の自然と共生しながら、住民が築き上げた優れた自然環境と農業のバランスが保たれ、安心できる農産物の生産に適した環境の地域であることなど厳しい基準を満たすことを条件に認定されます。

川場村は、この恵まれた自然環境を活かした農業や林業を営み、地域を繁栄させ、文化を醸成し継承して発展してきました。

現代を生きる我々のむらづくりの基本もこれに倣っています。自然と共生し、住民が安心して生活できる住環境づくりと、川場村の田畑で作った川場の名を冠した農作物の生産など、今の時代に合った取り組みを推進しながら、川場ブランドの住環境、産業、文化を創り上げていきたいと考えています。

今年からは、河川の豊富な水を活用した小水力発電や村土の85%を占める森林資源を活用した再生可能エネルギーの開発、あるいは新たな産業の創出や6次産業化など、産官学連携のもと、本格的に着手していきます。

常に住民と連携し、小さな村だからこそ出来る自然と共に営む村づくりを推進していきます。



赤倉川

群馬県 昭和村 「やさい王国」昭和村

昭和村は、群馬県北部の利根郡の南端に位置し、関越自動車道練馬インターチェンジから約120km、約80分の場所に昭和インターチェンジがあります。赤城山の北西麓で扇状に広がり、全面積の40%が農地という、大変農業が盛んな村です。

本村では、生産量日本一を誇るこんにゃく芋のほか、さまざまな野菜や果物などの農産物が栽培されています。

多くは首都圏に出荷をされ、『やさい王国昭和村』として首都圏の台所を担っています。

平成21年10月には、日本百名山の武尊山や谷川岳をはじめとする山々を一望できる大パノラマや農村風景などが評価をされ、「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。

標高500m～800mにかけて広がる赤城高原を、南北に走る「利根沼田望郷ライン」には、山々を一望できる観光ビューポイントが設置されています。ここには季節を問わず、多くの人がカメラ片手に訪れます。

村づくりの一環として「花いっぱい運動」を村内各地で展開し、村内を訪れる方々、きれいに咲いた花でお出迎えしています。

水辺環境では、村内NPOが水源などの草刈りを行い、ホタルが生息しやすい環境を整備しています。



レタス畑と武尊山

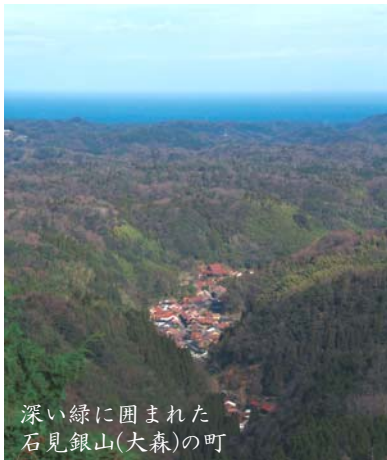


河岸段丘

第9回全国草原サミット参加市町村

全国
草原
サミット

島根県 大田市 自然と歴史のあふれるまち



深い緑に囲まれた
石見銀山(大森)の町

大田市は、島根県の中央部に位置する人口約38,500人、面積436.12km²の、自然と歴史に恵まれたまちです。

北部は日本海に面し海岸線は46kmにもおよびます。「一日漁の夕市」とよばれる独特の漁業習慣によって水揚げされた魚介類は、新鮮で市場の評価も高く、ノドグロやカレイなど魚種も豊富です。

中央部には平成19年7月に、日本では14番目、鉱山・産業遺跡としては初の世界遺産登録が決定した石見銀山遺跡があります。登録決定の決め手は、「環境への配慮」とされ、鉱山であったにもかかわらず、自然は破壊されておらず、遺跡は豊かな自然と共にあります。

世界遺産登録5周年となる今年は、観光キャンペーン“GINZAN WALKING MUSEUM”を展開し、多くのお客様をお迎えしているところです。

南東部には大山隠岐国立公園に属する三瓶山（標高1,126m）があります。主峰の男三瓶に寄り添うように女三瓶、子三瓶、孫三瓶など6つの峰が環状に連なっており、リフトを利用したハイキングから縦走登山まで楽しむことができます。

山麓には、西の原、東の原、北の原と呼ばれる草原があります。放牧地や市民のくつろぎの場として利用されると共に、大田市の花レンゲツツジやオキナグサ、ダイコクコガネなどの希少動植物の生息場所となっています。中でも最も広い西の原は、毎年春に火入れが行われ、三瓶山の草原景観の象徴的な存在となっています。



春の風物詩となっている
三瓶山西の原の火入れ

熊本県 西原村 阿蘇草原再生

西原村は熊本空港から約5km、阿蘇外輪山の西側のふもとに位置しています。俵山を中心に原野と山林からなる起伏の多い地形をなし、阿蘇山系独自の気候変化があり、雨量も阿蘇外輪山の影響を受け多くなっています。山からの風を多く受け、西原村では俗に東風のことを「まつぼり風」と呼びます。その風を利用し、俵山中腹に10基の風車を擁する風力発電所「阿蘇にしはらウインドファーム」が設置され、平成17年より運転しております。

村内には約1,050haの原野があり、ユウスゲ、オキナグサ、マツムシソウなど希少植物が生育しております。あか牛の放牧がおこなわれ、登山などを楽しむこともできます。原野のふもとには直売所もあり、村内外の方たちの癒しの場としても利用・管理されています。3月には地元住民とボランティアの方々の協力で野焼きの作業を行い、草原の維持に努めております。

現在阿蘇地域では、阿蘇草原再生協議会を立ち上げその中で阿蘇草原再生募金を行っており、阿蘇地域の草原の保全維持、再生を支援しています。

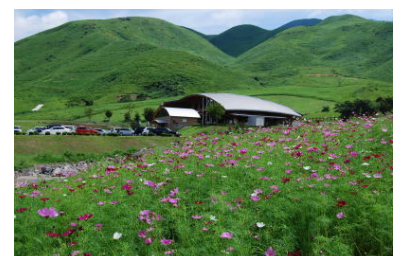
本村でもこの募金を利用し、荒廃した原野を草原に戻す取り組みを行っております。もともと草原だったところが放置され、木やササが生い茂ってしまった約20haにおいて、これまでに約5haを伐採し、枝や根を焼き払っています。平成23年からの5年でその約20haの荒廃原野の再生を目指しています。



阿蘇にしはらウインドファーム



あか牛の放牧



俵山交流館 萌の里

関連イベント

- **パネル展示** 10月28日・29日 会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館
会場に各地の取り組みや研究成果を展示します
- **特産品販売** 10月28日・29日 会場：みなかみ町立藤原小中学校体育館
会場に特産品の販売コーナーを設けます
- **星の鑑賞会** 会場：上ノ原「入会の森」
10月27日19時30分～ (雨天の場合は中止)
※現地見学会終了時に実施か中止か案内します

交通の案内

自家用車をご利用の方

関越自動車道水上ICから17km (約30分)、宝台樹スキー場を目指してください。
27日上ノ原「入会の森」(宝台樹スキー場の500m先) 宝台樹スキー場駐車場
28日29日藤原小中学校(宝台樹スキー場の1.5km手前) 遊山館駐車場・諏訪神社駐車場

電車をご利用の方

上越新幹線上毛高原駅下車又はJR上越線水上駅下車 送迎バスをご利用ください。

27日 東京駅9時44分発 たにがわ405号 上毛高原駅11時2分着

高崎駅10時30分発 水上駅11時35分着

送迎バス

上毛高原駅11時15分発 水上駅11時40分発 上ノ原「入会の森」12時10分着

28日 東京駅6時32分発 たにがわ401号 上毛高原駅7時53分着

高崎駅7時10分発 水上駅8時13分着

送迎バス

上毛高原駅8時発 水上駅8時20分発 藤原小中学校8時50分着

28日 シンポジウム終了後(16時40分発、懇親会終了後(19時30分発)

29日 サミット終了後(12時10分発)、上毛高原駅・水上駅まで送迎いたします。

電車案内 28日上毛高原駅18:22発 → 東京駅19:40着 上毛高原駅20:34発 → 東京駅21:56着

29日上毛高原駅13:22発 → 東京駅14:40着

メモ



第9回全国草原サミット・シンポジウムinみなかみ実行委員会